慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	グリーン英国史の最新版に就て
Sub Title	
Author	占部, 百太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.7 (1917. 7) ,p.925(83)- 935(93)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170701-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資し置き、毎年末に至りて二三一圓宛引出し、其年々の使用料を支拂ひ行くものとせば、其計算は

	元利合計	利子
初年	一、〇五〇、〇〇（円銭）	五〇、〇〇（円銭）
二年	八五九、九五	四〇、九五
三年	六六〇、四〇	三一、四五
四年	四五〇、九〇	二一、五〇
五年	二三一、〇〇	一一、一〇
計		一五五、〇〇

にして、合計一五五圓の利子を收得し得可きなるに、然るに實際には一、〇〇〇圓を即時に納入するに因りて此利益を享く可き途を失するが故に、結局即納に依りて蒙る各年の損失は、逐次に五〇圓。四〇圓九五錢……なりと謂はざる可からざるに至る。然れども更らに再び實際に立ち歸りて之を見れば、計算上に生ずる此損失は、割引の形にて享くる利益一五五圓に依りて實際に補償せらるゝことゝなるが故に、而して割引の因て生ずる趣旨目的は一に全く此補償に在りと解して差支なきが故に、余は、余が假設したる場合の如きに於て、割引に依りて得たる利益を各年に割り當つるには、既述の如く、初年度五〇圓……五年度一一圓一〇錢とすることこそ寧ろ事の實際に適合せるものにして、之を目して不當とすることこそ却つて不當なれと謂ひ得可しと信ず。余が舊稿に於て彼の如き計算を立たるは、全く之が爲めにして、要は割引に依りて享くる利益は、實際に支出したる金額に對して生ずる利子損失の補償に外ならざれば、是が割り當ても亦た之に準ず可きものなり、と解するに出づるものなるなり。即ち今敢て池田氏の認容を庶幾せんと欲する所なるが、更らに他方面より之を見れば、彼の如き場合は又た或は之を解して、甲は一方に於て毎年二三一圓宛の使用料を乙に支拂ふに對し土地家屋の使用權を享受すること約すると共に、他方に於て年五分の利率にて金壹千圓を乙に貸付け、各年度の末に於て乙をして其年の使用料を之より差引しむることを約したる場合に等しと謂ひ得可きかと思惟す。而して然るときは各年の利子收益を逐次に前の如く計算するの當然たること更らに一層明瞭なる可しと思惟す。若し果して然らんには又た借りて以て余の彼の計算に對する傍證たらしむるに足らん也。

却説以上述ぶる所に依りて、余は池田氏の難ず可き點とせられたる三ケ條に對し、略ぼ辨明を了したりと思惟するを以て、今や正さに擱筆せんとするに當り、此處に一言を附加して池田氏に謝せんとするは、余が舊稿に於て自ら言はんと欲して終に能く言ひ得ざりし點を、池田氏の批評に依りて稍詳細に說き得るの機會を得たることにして、此一事は池田氏の說に服すると否とに關らず、余の強く表明せんと欲する所たり。池田氏幸ひに之を諒せよ。（五月末日稿了）

グリーン英國史の最新版に就て

占部百太郎

一

グリーンの小英國民史 Short Pistory of the English People の初めて發行せられたのは一八七四年の事であるから、今より四十三年の昔である。我國でも舊くから歷史或は英語の教科書として用ひられ、人口に膾炙して居る程の古い著作であつて、夙に英米では何々叢書の中に編入せられて、クラシックと看做されて居る。既に一方古文として取扱はれつゝある此小國民史が昨夏グリーンの未亡人に依て大に增補改訂せられ新裝を凝らして學界に復活したる一事は、少なからず讀史界の注意を惹いた。舊版は一八一

五年のナポレオン沒落に筆を止めてあつたのを（數頁の Epilogue はあつたが）、夫人は之に約二百頁を增補して、一九一四年の歐洲大戰破裂に及ぼさしめ、アップ・ツー・デートの著作としたのである。西洋では學者が夫婦で合著をする或は合著とまでは行かないまでも、學者の妻が校正を讀むとか目錄或は索引を造るとか、夫の著作を內助する例は珍らしくない事で、經濟學者のフォーセット夫妻や、フェビアン協會のシドニイ・ウェッブ夫妻や、ラディウムの發見者キューリエ夫妻等は其著名の例である。今グリーン夫人が亡夫の遺志を繼で其著作を完成したる事は、學界の美談であると思ふ。少なくとも此事は英國史を學むで居る私の興味を誘ふた。私は小英國民史の改版せられたるを好機として、グリーンが著作の由來、彼が貧と病と戰ひつゝ出版せしまでの苦心慘憺、並びにグリーン夫人の增訂に關する事業を紹介したいと思ふ。

グリーンには他に A History of the English People 及び The Making of England と The Conquest of England 等の大著作があるけれど、彼が一生の大部分を捧げ、歷史家としての名聲を博したのは實に此小英國民史であるから、此書は即ち彼の代表的著作と云ふ可きである。short と冠したるは更らに浩瀚なる彼の著作に對する比較的の形容詞であつて、小英國民史決して小冊子ならず、今回の改版前既に八三六頁（併かも一頁四十五行）の大冊であつたのを、夫人の手に依て一〇〇八頁に增加せられたのである。故に此著の由來を述ぶることは、グリーンが四十六年の比較的短生涯の最も重要なる部分を語るものである。

二

些か煩雜に亘る嫌はあつても、多少小英國民史の著作に關係ある逸話は、茲に之を語らねばならぬ。ジョン・リッチャード・グリーンは一八三七年牛津に生れた。父は彼が十二歲の時に死むだけれど、其の遺產は彼の敎育費に充分であつた。八歲で牛津のモーダレン・グランマー・スクールに入つた。英國史上重大なる事件の舞臺たる牛津の地は、事々物々我が小ジョンの史的想像力を刺戟したのであるが、彼が歷史に興味を有つに至つた動機は、さる老婦人からジョルジ三世が六頭立の馬車で牛津に行幸のあつた物語を聽たときに始つたと、グリーン夫人は小英國民史の序文に述べて居る。爾來グリーンは牛津に於ける祭禮や宗敎上の儀式等に加はつて、益々考古的想像力を助長せられ、日曜等にはチュートルと附近の田舍を逍遙して、他日一代の史學者たる素養を造つたのである。

牛津の學校に在つても、又家庭に在つてもグリーンは嚴しい「トーリー」主義と「ハイチャーチ」の敎義に養成せられた。所が彼が後年歷史家としての立場を語る一個の事件が起つた。彼が十四歲の時モーダレン學校の課題としてチャールス一世論が出た。彼は此課題に應ぜむが爲少年として能ふ限りの參考書を讀むで、チャールス一世を非なりと論じた。其論文は優等として賞を獲たけれど、審査員であつたキャノン・モッレーは極めて嚴肅に彼に諭して、「貴君の論文は非常によく出來たけれど、其結論には贊成が出來ませむ。今に貴君が年を取つたら、必然結論を改めなければならぬ理由を發見するでせう」と曰つた。然し爾後彼は斷然「リベラリズム」の人となり、之と共に多くの疑問を懷くに至つた。次回の試驗に級の首席を占めることゝなると、元來嚴しい保守主義者であつた校長は、旨を諭して彼を退學處分にした。かゝる自由主義の學生が一級に勢力を占むる事は危險と感じたからであらう。彼も彼の保護者であつた叔父も非常に驚いた。所が、叔父は一日小ジョンが牛津のさる仕立屋の窓側にジョンラッセル卿の Dut-

ham Letter の展列してあつたのを凝視して居るところを發見した。夫れから、小ジョンは Ecclesiastical Titles Act の無稽なることを攻擊したのである。保守主義で頑固なる叔父は固より此種の邪說を忍容する者ではなかつた。一再ならぬ姪の非行に叔父は直ちに彼を其家から放逐した。後に復歸を許したけれど、自今是等の題目に就き言說せぬことを條件としたのである。

グリーンは一八五四年スカラーシップを獲て牛津のエース・カレッジに入つた。此時からいよ〳〵正式に歷史研究に志して、此研究は決してクラッスとか友誼又は敵對心とかに關はる可きものでもなければ、因襲的方法とか藝術的拘束とか、牛津大學の功利的目的とかに動かさる可きものでもないと固く決心した。彼は多大の苦心を以て、大學の課業と、自家の歷史研究とを別々の事たらしめむと努力した。彼は先づ手近かの材料から着手して、同好の士を求めむとも

せず、孤獨で歷史研究を續けたのである。彼が Oxford Chronicle と呼ぶ雜誌に Oxford in the 18th Century と題する一文を寄せたのは此頃であつた。此一文既に業に彼が後年の著作の特色とする豐富なる歷史的想像力と流麗なる筆致とを豫示して居る。彼は勿論非常に讀書した。併し讀書ばかりが彼の業務ではなかつた。讀書以外彼は都市の研究に熱心したけれど、當時は未だ都市の歷史的研究は等閑に附せられて、研究の材料は非常に乏しかつた。

III

一八六〇年グリーンはエース・カレッジを卒へて、東倫敦の最も貧乏なる寺院に牧師補として就職したが、信徒には極めて親切で、說敎も巧妙であつたので、僧としての評判は甚だ好かつた。其說敎の原稿には性來の研究心から多大の勞力を費したのである。然し僧職の餘暇あれば大英博物館に通つて、歷史研究を繼續した。彼

は此間に於ける俸給を擧げて、學校の費用と貧民救助とに費了して、夜間土曜評論の爲執筆して、生活費を得たのである。かゝる貧窮の中からも、尙書籍を購入したのであるが、固より一種の道樂であつたから、隨分一冊の書籍にも不相當の高價を拂つた逸話もある。錢の乏しいときは、晩餐を節してまで叢書類を一冊づゝ集めたのであるが、彼が愛藏書の一なる Acta Sanctorum の如きも、此種の苦心を經て獲られたものであつたと云ふ。

然し書籍ばかりが彼の知識の泉源ではなかつた。彼は最後に至る迄、其の倫敦生活を以て歷史上の最良の課業を與へたものと思惟して居たのである。彼が恐らく從來の歷史家が手を染めなかつた所の、眞個英國人民の生活なるものを學得したのは、此の倫敦生活中、或は寺院の世話人や學校敎師に就き、或は警察署や救貧事務局に就き、或は禮拜堂や寺院の勤行に就き、或は波止場人足や商買人や果物野菜呼賣人に就き或は夏時のコレラ流行地や冬時の經濟界變動より起る悲慘の光景に就き、夫れ〴〵實地研究した賜であつたのである。元來蒲柳の質で時々病床に就いたけれど、彼は其病臥の時間をも利用することを忘れなかつた。近郊のドライヴも、鐵道の旅行も、保養の爲短期のエキスカーションに通過した有ゆる都市も、悉く彼が智囊に何物かを附加へた。

グリーンは倫敦で敎職を執ること數年の後、一つは其健康が益々不良になつたのと、一つは彼の宗敎上の意見が益々英國々敎の敎義と相戾ることを發見したのとで、遂に斷然僧職を拋つて、一八六八年一時ランベスと云ふ處の圖書館員となつた。其翌年になつて病氣は益々亢進して、最早活動を要する仕事は出來なくなつて來た。醫師は肺患と診斷して、六ヶ月以上生存覺束ないと語つた。此の醫師の宣告が彼の生涯に

一轉機を來す動機となつたのである。

四

此の如く醫師から告げられたグリーンは、遂に多年研究の蘊蓄をば、生ある中に少しでも書殘さむと決心した。さうして置けば若し中途不幸にして斃れても幾分なりと事業が殘るであらう、又若し幸に壽命があれば、其れが後日の大作のイントロダクションになるであらうと。かくて小英國民史の著作は着手せられたのである。

グリーンは牛津に在つた時から歷史著作の考は在つたが、從來有り觸れたる所謂 "drum and trumpet" History には大に慊らなかつた。彼は其時から唯だ漠然と History of man and man を書かうと思つて居たのである。彼は初め英國人の歷史を書くには、英國宗教界及び思想界の中心たるカンタバリー大僧正の歷史を書くに如くはないと思立つた。然し研究の步を進むるに從つて、カンタバリーの大僧正必ずしも英國社會の中心人物ならざる事を發見した。夫れから、歷史研究の順序として地質學や、歷史前の英國の地理や、穴居人種並びに英國に侵入した諸人種の研究を爲すに從つて、結局「自分の氣に入つたやうに書かうと思へば、英國人それ自身の歷史でなければ可けない」ことを發見して、彼は曰つた。「國家は偶發である。其れは造ることも廢することも出來るもので、私に取つては眞實のものではない。然し國民は私に取つて正眞正銘である。何人も之を造ることも出來なければ又倒すことも出來ない」。

Dictionary of National Biography の寄稿家は、「グリーンが歷史の目的は社會の進展の大なる顯象を捉へて、人民の生活の進步を示すことに在つた。マコーレーが英國史の一時期に就て成したる所を、グリーンは其全體に亘つて試みた散在したる各種の材料からして、彼は生氣潑溂たる長編の活畫を描き出したのである。從來別々に取扱はれたる種々の題目――憲法史、社會史、文學史、經濟史其他――は、茲に彼の方法に依つて統一せられ、英國民進步の記錄を作ることに對して、其れ〳〵の貢獻を爲すやうに活用せられた。而してグリーンは諸都市の地理の研究が、歷史に取つて如何に大切なる要素たらしむることが出來るかを初めて示した人である」と評して居る。彼が歷史家としての態度及び彼が歷史の眞價は、是等數語の中に盡きて居ると思ふ。

醫師の豫言は幸に適中しなかつた。其後六ケ月は過ぎ去つても、グリーンの生命は無事であつた。然も貧と病とは絕えず彼を苦しめた。今期は外國に轉地したので、多くの參考書籍を携帶することが出來ず、爲に渺なからざる不便を感じた。彼は是等の苦痛や困難と戰つて、著作を進行せしめた。かくて五ケ年の歲月を費して小英國民史は成つたが、其のいよ〳〵脫稿する迄、原版は再三再四改竄せられ、果てしなき程修訂は加へられたのである。

五

一八七四年グリーンが卅六歲の時、Short History of the English People はいよ〳〵出版せられた。一八六九年グリーン記して「出版者は今日歷史は文學書中一番賣行きの惡いものと云ふけれど、其れは歷史をば益々人民の感情に愬ふ可き有ゆるものから引き離さうとする傾向があるからである」云々と曰つて居るが、彼の小英國民史一度發行せらるゝや、讀書社會の歡迎する所となつて、最初一年の間に五版を重ねた。是れは云ふ迄もなく、彼の歷史の文體と云ひ、其材料の取扱方と云ひ、又其見解や史實の取捨等やが、在來の歷史と違つて、全く一新機軸を出したからである。

然し好評嘖々たる半面には、グリーンの寧ろ

豐麗に失する文體や、其の自由主義的史觀や、其の破天荒なる材料の取扱方に對して、酷評を下した者も少なくなかつた。小英國民史の初版には、實際重要ならざる點に於て多少の誤は免れなかつた。病身で神經過敏となれるグリーンに取つて、是等の批評は、彼の所謂「寂寞」を感せしめたのである。彼は自から辯護して云つた。缺點は勿論あるけれど、之は彼と引き離すことは出來ない、と云ふのは、是等の缺點は彼の信念と緊しく結合したものであるからである此の小英國民史は縱令名稱は異つて居るとしても、實際上彼が牛津で計畫したものと同一のものである。其れで其缺點を改めやうとすれば、彼の歷史に關する概念を全然變へなければならない。諸國民の歷史の基礎を作つたるは、政治家等の政策ではなくして、國民的感情の大なる衝動であつたと云ふ彼の信念も、夫れから政治史は其大なる意義に於ては、社會史を基礎としてはじめて之を了解することが出來るし又正しいものとすることが出來ると云ふ彼の確信も、兩つながら拋棄せねばならなかつた云々。彼は尙書して「余の理論は間違つて居るかも知れない、然し本當の信念を拋棄して余が敬愛する他の人々の善き言葉を引用せむよりも、余の眞と考る所を守り、縱し上手に出來ないまでも、自分の力で出來る最善の努力を盡した方が優しである」と曰つて居る。

以上はグーリン自から其著作の立場を辯護した言であるが、大英百科全書（第十版）の寄書家が小英國民史を評した言は、中々正鵠を得て居ると思ふから、而かも其用語が委曲周匝で譯文では誤解を招く虞れがあるから、原文の儘、引用する。

"While generally acculate in his statement of facts, and showing a firm grasp of the main tendency of a period, he often builds more on his authorities than is warranted by their words, and is apt to overlook points which would have forced him to modify his representations and lower the tone of his colours. From his animated pages thousands have learned to take pleasure in the history of their own people, but could scarcely learn to appreciate the complexity inherent in all historical movements."

大英百科全書の寄書家が評した如く、グリーンは往々其典據としたる材料から說を立ること多きに過ぎ、又其表現を加減し着色の調子を下ろす可き諸點を看過したる嫌もあらう、又有ゆる歷史上の運動に固有なる錯綜と云ふことは彼の歷史に認め難いであらうけれど、是等の欠點は畢竟ずるに、一方彼の長處たる歷史的想像力の致す所である。要するに、グリーンは、其の平生主張せし主義に依つて英國史を書いた最初の歷史家であつた。此の如くして、彼は當時に於ては他の如何なる國民も未だ所有しなかつた其コンモンエルスの歷史をば、同胞國民に貢獻したのである。其の歷史に對して、彼が幾多の反對論や批評に遭遇したのは、幾分か彼の思考の新機軸に對する尺度であつたのである。然し其成功も、又其批評も均しく、眞正の學者に對して來るが如く、來つたのである。

小英國民史は當だ學問上の價値あるはかりでなく、又英國人の自由を高調し、若くは之に同情したる道德的調子の優秀なる點に於て價値あるばかりでなく、一個の文學的乃至藝術的製作品として、非常の價値を有つて居るのである。

「グリーンは實際單に學者たるに止まらずして藝術家であつた。彼は形式の美を極愛して、其意に投ずるに至る迄は推敲して已まなかつた。小英國民史は徹頭徹尾其各部分に於て序次あり且情緒に充ちた一大概念の作物である」との Dictionary of National Biography の記者の批

評は、決して過褒の言ではない。有名なる英國憲法史の著者スタッブス博士亦、此著を評して些細の缺點を擧げるだる後「總て彼の著作は眞實なる獨創の著作である。彼を熟知する人の外、他を魅する彼の平易快活なる文章の下には精勵なるる學者の深き研究と不撓なる努力の伏在せことを看取する者は少ないであらう。」「而して今一個吾人が彼に負う所を附言せむか、彼の歴史には、他の何物よりも彼の英國史をして通俗ならしむる彼が其話説を語る方法の驚く可き朴實美麗なる點である」云々と云つて居る。スタッブスの如き英國歴史の大家からして此の如き評の出でたのは、以てグリーンの著書の眞價を充分に裏書するものである。

六

グリーンは一八七七年ミースの執行長（アーチデイーコン）の女アリス・ストップフォアド嬢と結婚した。グリーン夫人は此大歴史家の匹偶たるに恥ぢなかつた。グリーンが其後小英國民史の擴大版或は圖書館版として、著はした A History of the English People (1877–80) 及び學者の參考書として書したる The Making of England (1882) The Conquest of England (1883) 等の大著は、何れも夫人の熱切なる同情と慫慂と内助の賜であつたことは著名なる事實である。グリーン夫人には別に Twelve English Statesmen 叢書中の Henry II. の外 Town Life in the 15th Century 及び Home University Library 中の Irish Nationality 等の著書ある彼女自身一廉の歴史家であるから、其内助の功の如何に多大であつたかは、略ぼ推察せらるる。

夫人がグリーンの死後一八八八年を以て小英國民史の改版を發行したのは、夫が生前の遺言によつたのである。併かも夫人は亡夫の遺命をば最も誠實に、又能う限りの努力を以て遂行した。彼女は此貴き使命を遂げむが爲、亡夫の友人であつたスタッブス、クレートン兩博士を始め、ブライスやレッキー等諸歴史家の助力を藉りた。わけて同じ英國歴史の大家たるガーディナー教授には最も負う所があつた。夫人は一八八八年此の改版を發行するとき、グリーンの小英國民史著作の由來に就て長文の緒言を附した私が本文を草するに方つて、此緒言に負う所の大なるや、云ふ迄もない。

グリーン夫人が一九一六年版を發行したる次第に就ては、何等序文中に語る所がないから、今に於て之を知るよすがもない。其は兎に角一八一五年に擱筆された此の不朽の名著が、著者の未亡人の手に依つて一九一四年大戰破裂に至る、迄增補せられて、いよ〳〵完璧とせられた事は學界の慶事と云はねばならぬ。而して夫人の增補が亡夫の名作を辱めざる程の成功である事は、嚴正なるタイムスの新書評家が、Everyman's Library 版の小英國民史の Epilogue と比較して其間に霄壤の相違あることを證言せるに徴しても明かである。私は他日精讀の上其の内容を紹介するの機會を得たいと希望して居る者である。